

第47回 日文研フォーラム

■

日本疾病史考

「梅毒」の医学的・文化的概念の形成

On the Medical and Cultural History of Syphilis in Japan

■

ウィリアム D. ジョンストン
William D. Johnston

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原 猛

● テーマ ●

日本疾病史考

「梅毒」の医学的・文化的概念の形成

On the Medical and Cultural History of Syphilis in Japan

● 発表者 ●

ウィリアム D. ジョンストン

William D. Johnston



発表者紹介

ウィリアム D. ジョンストン

William D. Johnston

米国・ウェスリアン大学歴史学部助教授

1955年生れ。1977年エルミラ大学卒（国際関係論専攻）。ハーバード大学より1981年に修士号（東アジア地域研究専攻）を、1987年に博士号（東アジア歴史と言語研究専攻）を取得。この間、1983～85年、東京大学社会科学研究所外国人研究員。1988年1月から6月までハーバード大学講師。1988年7月よりウェスリアン大学歴史学部助教授。1992年1月より国際日本文化研究センター客員助教授。専門は科学史。

主な著作：

「18世紀日本の医学における科学革命－蘭方の発展のための思想的な前提」
(Scientific revolution in 18th-century Japanese medicine: The intellectual preconditions for the adoption of Dutch medicine), 日本医歴史学雑誌、第27巻、1号・2号、1981年

The Forgotten Epidemic: A History of Tuberculosis in Japan, Harvard Press, forthcoming

"Tuberculosis," in The Cambridge History and Geography of Disease, Kenneth Kiple, ed., Cambridge University Press, 1992

Review of Epidemics and Mortality in Early Modern Japan by Ann Bowman Jannetta, The Journal of Asian Studies, 47, 1988, pp. 376-377.

Review of An American Scientist in Early Meiji Japan: The Autobiography of Thomas C. Mendenhall, Richard Rubinger, ed., Journal of Asian History, 25, 1991, pp. 105-106.

Review of The Formation of Science in Japan by James R. Bartholomew, The Journal of Asian Studies, forthcoming

まずは、ちょっと個人的な話から進めていきたいと思ひます。

私はどのような仕事をやっているかという事について人と話をする時、ちょっと変な目で見られることが時々あります。「大学の先生」をやっているという事でさえが疑問を呼び起こす。相手のあたまで、*「あいつらはいったい何をやってはるかようわからんナ」*か、それに似ているようなことがよく浮かんでくると思ひます。私の子供の頃、父親がそのようなことを頻繁にっていました。

それですめば気楽に終わりますが、こんどは、「何の研究してはるんですか」と聞かれると、話がますます長くなりそうです。相手に聞く気があれば、一時間でも喋れます。

もちろん、こちらは構わないが、相手にそれだけの話を聞く気があるかどうかが問題です。返事として、だいたい「日本史ですが、おもに疾病史をやっています」か、それに似たようなことをいひます。

すると相手は「それはおもしろいことをやっていますね」と、口ではいいながらも「やっぱり、ようわからんナ」と、目が語っているときもあります。そういうときには、なるべく違う話題を持ち出します。しかしそうではないときには、相手はだいたいその次に、「お医者さんですか」と聞きます。現代医学のまわりに

一種の神秘性がただよっているので、数年間の非常にむずかしい勉強をしないと医学のことなどまさか分かるわけがない、というような印象が一般的にあると思います。

「いや、私なんかは診断とか治療をやっていませんので、医者にとって必要な知識はほとんど関係ない。ひとつの病気の研究をやりだすと、その病気についての現代医学の基礎的なことはすぐ分かります。」

相手がこの点を納得してくだされれば、次に聞かれることはだいたい、「今、どんな病気の研究をしてはりますか」という質問です。

「最近、梅毒の歴史をちょっとやっています」と答えると、相手にそれ以上のことを聞く気があるかどうかはすぐ分かります。その目が明るくなるかどうかが目印です。もしその目が明るくなって「そのようなことを研究して、実際になにがわかるのですか」と、本気で聞かれるとき、本気で答えます。

私は、学部生のころ、歴史にはほとんど興味を持っていませんでした。逆に歴史は日常生活からほど遠いものだと思っていました。そのころ、私は日本の政治学を勉強して外交官か、そのような職業をめざすつもりでした。三回生の時に、

一年間日本で勉強する機会がありました。その時に、日本人の歴史がよく分からなければ今の日本人もよく理解できない、ということを感じました。それで大学院で歴史を勉強することにしました。

そのころ、一番不思議に思ったことは、「日本はわりと最近まで西洋の文化とほとんど関係なかったのに、なぜそんなに早く西洋の文化のあらゆる側面を受容できたのか」という問題でした。歴史を通してこのようなことを理解しようとする、必ず杉田玄白や『解体新書』にぶつかりますので、医学史も勉強することにしました。

ちょっと話がとんでしまいましたが、医学史を勉強しているうちに病気の歴史そのものにも強い興味がわいてきました。時代と場所によって、病気の文化的な解釈も、その物質的な現れ方もたいへん違いますので、その歴史も限りなく面白くなってきました。ということは、病気の歴史的な変化が分かれば、その文化と社会の歴史的な変化も理解できます。この点を少し説明したほうがいいでしょう。

われわれが現在、使っている病気の名前のほとんどは歴史的に新しいものです。病気の名前そのものが古くても、現在の意味はわりあい新しいのが殆どです。医学の技術や思想の変化があまりにも早く、たとえば百五十年前に言った「微

毒」の意味と今のそれとは理論的にも治療上にもずいぶん違います。「どこが違うか」というよりも「どこが似ているか」と聞いたほうが適切だと思います。また、一般的にも、世間の黴毒に対する反応も今と百五十年前とは違います。この医学的及び文化的な変化を辿って行って、その変化のきっかけがわかれば、日本の社会と文化の大きな変動もある程度、明らかになると思います。

ところが、細菌の進化は大きな生物よりは何倍も早いので、新しい病原菌がエイズ菌のように突然に現れてくる可能性もあるし、また古い病原菌が消えてしまう可能性もあります。このようなことがありますので、疾病史のなかで、百パーセント問題のない事実はほとんどありません。

黴毒の場合とはくにむずかしいのです。一般的に、コロンブスが西インド諸島から帰った時に彼の船に乗っていた人のだれかが、はじめてヨーロッパに黴毒菌を持ち込んだといわれています。ある学者の間でもこれが定説になっていますが、その信憑性は非常に実証しにくいものです。その当時の菌が残っていればすぐ分かりませんが、いうまでもなく残ってはいません。もし黴毒菌が西インド諸島から来なかったとしたら、すでにヨーロッパか中近東にあった黴菌が進化上、変身して新しい種類のものになった可能性もあります。ですから、黴毒菌の由来はよく

分らないとしかいえません。

しかし、いずれにしても、黴毒はほぼ五百年前から確かにヨーロッパで流行しました。その当時の名称も非常に意味深いものです。イタリア人はそれをフランス病と呼び、フランス人がそれをナポリ病と呼んで、ドイツ人はそれをフランス病とかイタリア病とか、またスペイン病と呼びました。イギリス人はそれをフランス病とかスペイン病と呼び、ロシア人にとってはポーランド病でした。いずれの呼称にも、黴毒が外国だけではなく必ず敵国からきた病気だったという意識が明らかに現れています。現在使われている言葉、つまり「ジフィリス」は、一五二一年にはじめてあらわれました。それまで一定の名称はありませんでしたが、そのあとに「ジフィリス」といわれたものは必ずしも現代の医者が黴毒と呼んでいるものではありませんでした。実は、西洋医学の場合にも、一九世紀の後半まで黴毒とその他の性病はあまりはっきりと区別されていませんでした。

また、東洋の場合にも黴毒の呼び名に歴史の物語が潜んでいます。まず、中国の場合を少し見てみましょう。この講演会のポスターを見て、「黴毒」の字が読めてもその意味がよく分からなかった人がいたらしい。「カビの毒ってなんでしょうか」といったそうです。しかしそれは実に大事な質問なのです。それから、どう

してこの「カビの毒」は、もっと有名な「梅の毒」と連想されるようになったのでしょうか。この両方の呼称はその当時の価値観や基本的な考え方を表現しています。

黴毒の起源論も含めて、一六世紀のはじめに中国に新しいかたちの性病がはじめて現れたことは確かです。ヨーロッパ人が黴毒を持ち込んだ可能性が非常に高いですが、当時、中国の医者たちはそのように解釈しなかったらしいのです。中国人が付けた名称のほとんどはその病気に特有の症状を現しています。現代の黴毒と思われるような病名は一五三三年に書かれた中国の文献にはじめて出ます。それは「楊梅瘡」、つまり「ヤマモモカサ」なのでした。黴毒の初期の症状はヤマモモに似ているのでそのような名前が付けられました。同じように、このころから「綿花瘡」ともいわれました。また、地名とも結び付けられました。おそらく、広東地方に多かった病気だったので最初は「広東瘡」と呼ばれました。それが省略されて、「広瘡」になりました。一六世紀のはじめから一八世紀の終わり頃まで、「黴毒」の呼び名の種類は爆発的に増えました。一七九九年に書かれた黴毒についての専門的医学書のなかに、少なくとも五七の異なった漢語の病名が出ています。そのほとんどが何らかの黴毒に特有の症状が起源を現しています。

「カビ」という字を使っている「黴毒」は、症状のことも原因のことも表現しています。黴毒の初期の症状はカビのようなものに見えたらしいし、またカビそのものがその症状の原因としても考えられました。一六三二年に中国で書かれた『黴瘡秘録』という本のなかで、黴毒の原因は次のように説明されています。つまり、広東の近辺には湿気が多くて、マラリアをおこす湿っぽい雨がよく降ります。その食べ物はいつも辛くて熱い。蛇とか虫とかが非常に多くて、あちらにもこちらにも、ものが腐っている。このような環境のなかで男と女が淫れると「淫熱」、つまりミダレタネツの邪気が生じてきます。淫熱の邪気がつもつてくると毒瘡がおこります。この毒瘡の傷口と接触すると伝染します。

これを少し言い替えば、『黴瘡秘録』の著者にとつて、黴毒は中国で自発的に現われてきた伝染病であるといつても、べつに医学の理論的な問題にはならなかったのです。そしてこのときから一九世紀の半ば頃まで、中国でも日本でも黴毒が湿っぽい環境とも、淫らな性行為とも連想されるようになりました。

ところが、なぜ「カビ」の字が「ウメ」の字になつたかは、よく分かりません。といつても中国語には少なくとももう一つの例があります。「梅雨」、つまり「ツユ」の漢語の「梅」も、もともと「黴」としてかかれました。ツユのあいだにカ

ビがよく生えるということでしょう。梅毒の「ウメ」も梅雨の「ウメ」も、もと「カビ」だったらしい。しかしツユのこともバイドクのこと、カビと連想されることよりも、ウメと連想されるほうが少しでも、より愉快に感じるということでしょうか。

 梅毒がいつ日本に到着したかということは、はっきりしません。少なくとも中世前期より、わりあい軽い性病が日本にありました。といっても、その当時に書かれた医学書が描写している症状だけでは何の病気だったかよく分かりませんが、確かに梅毒の症状ではありません。一六世紀の初期にいわれる倭寇が梅毒をはじめて日本にもたらしたとよくいわれています。しかし最近の説によるとそれよりも早く北海道にきていたそうです。いずれにしても、梅毒はいつ日本にはじめて入ったかという質問自体に問題があります。というのも、梅毒のような慢性病はおそらくいくつかの経路を通して日本に入ってきたのでしょうから。まったく違う船の乗組員がおなじころに平戸・長崎・熊本・境の諸港で梅毒の種をばらまいていたことは想像に難くないことです。つまり、多重・複数の経路があったと思います。いつ、どこが一番最初ということが大切というよりも、一六世紀全期にわたり、梅毒はどのように伝播されたかということが大事なのです。

黴毒については、当時の日本で呼ばれた病名がその伝播経路についての示唆を与えてくれます。一五一二年に「唐瘡」や「琉球瘡」という病名が京都に住んでいた竹田秀慶の『月海録』にでています。そして長崎では、「ヒエ」と「ポク」ということばがありました。ヒエはおそらく湿気のことをさしていますが、ポクはヨーロッパからの外来語に違いないでしょう。江戸では黴毒は単に瘡（カサ）と呼ばれたそうですが、東北の方ではそれに「江戸ホウソウ」という名前がつかまりました。また、全国的に長崎瘡や肥前瘡という名称が使われました。これらの名前の中で、一六世紀後半に編集された『日葡辞書』には「唐瘡」（トウガサ）しかのっていないので、それがおそらく当時によく使われたことばだったのでしょう。いづごろ使われたのかよく分かりませんが「南蛮瘡」（ナンバンガサ）という名称もありました。ということは、日本人もヨーロッパ人とおなじように、この病気にその発生地と思われるところに因む名前をつけていました。「花柳病」は今もよく知られている黴毒の名前ですが、それは明治期から流行しはじめたのでこの場合には関係はありません。

戦国後期と江戸初期によく使われたもう一つの名前は「横根」でした。この単語は『日葡辞書』にも、ルイス・フロイスの『日本覚書』にも出ています。「横根」

はたぶんこの病気の初期症状を描写しているように考えられます。この名称はべつとして、フロイスのコメントは非常におもしろいものです。フロイスは次のように書いています。「われらにおいては、横根にかかるなど、きたならしく、恥ずかしいことである。日本では、男も女もそれをありふれたこととして、少しも恥とはしない。」

フロイスのこの文書は二つのことを示唆しています。その一つは、彼が見たかぎり、梅毒かそれに似ている性病が非常に多かったということです。そのもう一つは、当時の日本人が性的なことにたいして、当時のヨーロッパ人よりもかなりおおらかだったということです。フロイスはたしかに日本の女性の自由さを見て驚きました。彼はつぎのように書いています。「日本の女性は処女の純潔をなんら重んじない。それを欠いても、榮譽も結婚（する資格）も失いはしない。」そのうえ、日本の女性は自由に動きもとれたし、また、何回離婚しても、何回妊娠して墮胎しても、社会的に問題はなかったということです。そのうえ、当時の都会に住んでいた多くの男性は遊廓や岡場所へよく通っていたことはいうまでもありません。このような環境のなかで梅毒が広く伝わったことは不思議ではありません。といっても、これは少し大げさにとられる可能性もあると思います。江戸時代の

医学書と最近の考古学や民俗学の資料によると、明治時代まで黴毒はおもに都会に住んでいた人々の健康問題でした。一八世紀の日本を歩き回った医師は、一七八八年に次のように書いています。「予諸国ヲ経歴セシ内、肥前長崎或ハ京大坂江戸ナドノ如キ都会繁華ノ地八十人ニ八、九人ハ此病ヲ病。」（永富）医者の中からみても、この時期の日本の黴毒はたいへんな問題でした。人口の八割から九割ぐらいが黴毒にかかっていたことは、じつに驚くべきことです。しかし最近の考古学の研究によると、この数字はそれほど大げさなものではありません。江戸の墓地に埋められていた頭蓋骨の調査に基づいて、ある人類学者が江戸の人口の五五パーセントが黴毒にかかっていたという結論を出しました。社会階級による差違もありました。武士階級と思われる人の約四〇パーセントが黴毒にかかっており、町人の下層階級では約七〇パーセントにもなっていたそうです。

ところが、江戸時代の間に、農村や漁村は非常に閉鎖的な共同体を守ったので、黴毒の煩いから殆ど免れました。瀬川清子という民族学者の全国的な調査によると、明治中期か後期まで、田舎の村の人々は男女を問わず、結婚前の性行為はかなり自由に行われていたそうです。しかし田舎の男性が都会の遊廓へ通い始めた時期から、この病気が大きな問題になりました。問題といっても、当時の田舎の

男性にとって、梅毒は恐れるべきもの、または恥と思うべきものよりも、むしろ誇りに思っていました。瀬川氏は漁村について次のように書いています。「結婚が自村のなかで行われていた頃には、若者・娘の健康もそれなりに維持されておったのだが、明治期に入って急速に交通の便がよくなると、遠国の漁船が長崎県の五島の近海にくるようになり、またこちらからも遠国に出漁するようになりました。すると村々にも性病が蔓延してナンバンガサを経験してはじめて男一匹の器量が定まるなどといった。」(三〇—三三頁) この場合には普通と逆の事情がみられます。つまり、性的な自由のために梅毒が蔓延したというよりも、梅毒が蔓延しはじめたために漁村に性的な自由がなくなりました。そして明治中期からは、兵士が都会で梅毒にかかり、それを自分の村へ持って帰った例も多かったことでしょう。いずれにしても、明治時代になってから梅毒がはじめて都会中心の問題から全国的な問題へ転じたようです。

すこし遡りますが、江戸時代の医学書を通して、梅毒にたいする考え方に大きな変化が見られます。

戦国後期から江戸中期にかけて、梅毒が医学書の中で現れると、症状と伝播様式と治療に対する短い説明に限られています。その症状は非常に大ざっぱに描写

されていますので、現在で言う黴毒も淋病も確かに含まれています。西洋の医学でも一九世紀の終わりごろまで、この二つの病気はあまり区別されていませんでした。それから、少なくとも江戸初期から黴毒は伝染も遺伝もするように思われています。このような発想は医者の間にも民衆の間にもそのまま二〇世紀まで続いています。そして治療としては水銀が入っていた薬もこの時点から推薦されてきました。この水銀の治療のなかには技術の伝達の謎が潜んでいます。日本人はこの療法を中国人に習ったのでしょうか、中国人が自分でそれを発見したのか、西洋人にそれを習ったのか、が分かりません。とにかく、水銀療法も二〇世紀のはじめごろまで黴毒の主な治療法に使われました。

しかし黴毒の症状の描写も、伝播様式の説明も、治療法も、江戸時代の間中あまり変わらなかったとしたら、いったい何が変わったのでしょうか。

まずは、黴毒の独特な伝染経路のため、医者がその病状と治療だけではなく、その伝染を促すような社会事情についても、倫理的なコメントをするようになりました。たとえば、小石元俊という京都の医者は一八世紀後半に次のように書いています。「凡黴毒ハ古昔無シテ後世ニ至テアリ 其故ニ古昔ハ世ノ淳厚ニシテ聖人ノ道天下ニ盛ナル 故ニ青楼ノ娼婦ノ如キ者ナシ 是ニ依テ此病ナシ 後世ハ

聖人ノ道衰へ 世ノ風輕薄ニシテ青樓娼婦往々ニナル 故ニ因テ起レリ」。という
ことは、昔の人はみな儒教の理想的な倫理価値観にしたがい、自分の欲望を統制
するような自制力をもっていました。この倫理観が崩れてしまったので、梅毒が
はやり病になりました。

しかし、倫理観が崩れてしまったといっても、小石氏の分析はその社会的原
因を探さないで医学的な説明しかしていません。彼は続けて書いています。「青樓
娼婦ヨリ起ルコト必セリ。蓋シ娼婦ノ為物日ニ数十人ト交接ス 故ニ其陰中ノ氣
血変シテ ヨ濁ノ邪氣トナル 是ニ因テ娼婦トナリテ後大抵ニ三四年ノ中自其毒
ニカブレテ梅毒ヲ病ムヲ 青樓ノ言ニトヤスルト云其毒男子ニ著テ病アリ 梅毒
ノ因概子カクノ如シ」。つまり娼婦たちの行為によって、梅毒がその体のなかで自
発的に発生するというのです。このような梅毒の原因論は中国にもありましたが、
小石氏はその他の日本の医師とおなじように、同時にいくつかの原因論を唱えて
います。娼婦の性行為に梅毒の原因を置きながらも、そのうえに外国からきたも
のでもあるという医師がかなり多かったです。その矛盾はとくに問題として考
えていませんでした。

また、一八世紀の後半から一九世紀の後半まで、日本のほとんどの医者は、あ

る病気はほかの病気に変化する可能性があると考えていました。著者によって、
梅毒が癌・瘰癧・結核・労症などの病気に変化していくと書いています。という
ことは、この当時の医者にとって、病気の分類は一定したものではありませんで
した。むしろ病気が体の一つの状態として考えられて、個人の体の特徴によって
あらゆる方向に走っていく可能性を持っていました。

このような医学思想の背景があったからこそ、日本の医師は一九世紀の後半ま
で梅毒と公衆衛生との関係についてあまり発言していかないことは不思議ではあり
ません。医師の仕事は患者を治すことであって、町の健康を守る役ではなかった
のです。ですから、日本の最初の検徴制度は日本人が自発的に作ったものではな
く、西洋人に促されてできました。異邦人が自分達の健康のことを心配していた
だけだったのです。

江戸時代から明治後期にかけて、もう一つの大きな変化がありました。それは
一般民衆にとって、梅毒が「少しも恥ずかしくない」病気から、大変な恥として
考えるようになったことでした。これはたぶん、このテーマのもっとも面白い問
題でもあると思いますが、同時にもっともつかみにくい問題でもあります。いま
のところは、それを説明するために推測しかできませんし、また、あまり時間も

ありませんので、今のところはそれを省いておきます。

さて、最初の質問にもどりますと、黴毒の歴史的な研究をして、何が分るでしょうか。まず、われわれは黴毒を一定したものととして考えやすいのですが、江戸時代の人はもちろん、明治時代の人も、われわれとは大分違う考えを持っていました。しかし、もっとも大事な結論のひとつは、江戸時代の日本人は決してこの病気に対して統一した考え方を持っていなかったことです。黴毒になって恥ずかしいと思った人もいれば、なんとも思わない人もいました。このこと自体はそんなに大したことではないと思いますが、この病気を通して日本の文化の多面性が浮き出して見えて来るようです。

これはささやかな例にすぎませんが、日本の文化史をこのように探っていけば探っていくほど、その多面性の新しい側面が現れてきます。不思議なことは山ほど残っていますので、やはりこの仕事を続けてやりたいと思います。

発表を終えて

19世紀の末から現代医学が新しい治療や予防法を発見し、それまで不治の病として知られていた伝染病が次から次に日常生活から姿を消していった。しかし1980年あたりから、エイズという恐ろしい伝染病が新しく現われてきた。それが不治の病で、現代医学に大変なショックを与えた。当時の人々にとって、これは全く新しい現象に見えた。ところがこれは梅毒が16世紀の初め頃から世界中に流行した現象と似ているところが多い。したがって、梅毒の歴史をよく理解出来ればエイズもまた新しい目で見られるように思える。

拙稿は梅毒の歴史研究の試みの第一歩である。国際日本文化研究センターに来たときには、このような研究をする予定はなかった。しかし国際日本文化研究センターの先生方と色々話している間に、日本の疾病史の研究を続ける価値があるように思えてきた。この点で先生方、特に山田慶兒先生や園田英弘先生に感謝している。

W:U Johnstone

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・ 日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロップ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
45	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン(米国ウェスリアン大学助教授・ 日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 - 『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」

○は報告書既刊

発行日 1993年7月16日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

©1993 国際日本文化研究センター

■ 日時

1992年11月10日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

